

水稲 初冬直播き 農作業学会が講演会

作業分散に期待



播種量や種子コーティングで苗立ちを確保する(写真提供:岩手大学)

日本農作業学会は3月27日、新潟大学(新潟市)で講演会を開き、水稲を収穫前年の10〜12月に播種する「初冬直播き」を取り上げた。担い手への水田集積が進む中、農閑期に作付けを分散することで春作業を軽減する新技術として関心が高まっている。2022年時点で東北や北陸など40社で導入されている。北陸の導入農家からは、中山間地の湿田に対応した播種方式なども報告された。

初冬直播きは、寒冷地でティンクする。播種量は東積雪前に播種し、圃場で種北・北陸の事例で10㍗当たりを越冬させる。乾もみり5〜20㍗と慣行より増やに、出芽率を高めるチウラし、播種深度は1〜3㍗と△剤(商名「キトランR 浅く一定にする。12フロアブル」)をコー

新潟県関川村の中山間地

中山間で反収522キ
播種機の工夫で湿田でも

域で、22年産(21年初冬播種)から試験導入する有限会社上野新農業センター(水稲など50㍗)の大島毅彦代表は、「つきあかり」2・3㍗で10㍗当たり収量522キを確保できた」と報告した。23年11月中旬に17〜18㍗播種し、苗立ち率は29%で「十分な苗立ちと収量が得られている」と評価した。

播種機は、耕起・播種・施肥・鎮圧を同時作業が可能なスリップローラーシードを採用。湿潤な土壌条件でも、適正な播種深度が得られ、播種後に代かき状態になった水田でも、その後、排水がなければ出芽して一定の収量を確保できたとする。

同社の社員は5人で、将来的に100㍗規模への拡

大が想定されるという。大島代表は「農地を守るため、増えた分はできるだけ初冬直播きにして、春作業を現状並みに抑えたい」と期待する。25年産(24年初冬播種)は「こしいぶき」を加えた2品種4㍗に拡大させた。安定的な収量確保に向け、当産種子の調達先の確保や採種圃場・保管場所の整備などを進めるとした。

◇ ◇

初冬直播きは、岩手大学が開発し19年ごろから一部地域で導入が始まった。東北で10㍗当たり収量600キ以上を確保する例もある。講演会では研究者や農家が意見交換し、圃場選定や播種深度の調整など、収量の安定確保に不安定と雑草対策の重要性が強調された。また、前作の収穫と播種時期が近い場合、同一品種を作付けるなど漏生イネ対策も不可欠との指摘も挙がった。

温暖地の`早春、直播きも研究中

岩手大学の下野裕之教授は「導入には資材コスト増や減収リスクもある」と説明。全国の農家などで構成

する研究会で、さらなる技術の検証や普及を進めるとともに、減収が見込まれる際の作付け切り替えなど、導入する場合は柔軟な経営判断が必要とした。

このほか、下野教授は、初冬直播きに加え、新たに温暖地で年明け以降も含めて早期播種する「早春直播き」も組み合わせ、水稲直播の播種適期を11月〜翌6月まで拡大する「いつでも直播」の研究状況も報告。技術確立に向け、24年度からの5年間、県や農研機構、大学など10機関が連携し、北海道から九州まで計10道県で実証している。暖地向けに出芽時期を制御する新規種子コーティングやレンゲとの間作で抑草するリビングマルチなど防除技術の開発も進めるとした。

農業共済新聞 令和7年4月9日(水) 7面
※この記事は農業共済新聞の許諾を得て転載しています。
※無断転載・複写を禁じます